

枕詞と序詞

福井久藏

一 枕詞

枕詞といふ名辭は私どもの耳には何となく親しく響く言葉で、相當に深い内容を有つてゐると思ふ。近代人は和歌の技巧を排斥するあまり、この言葉を無批判に顧みない傾向がないでもない。これは適正に日本文學を取扱ふ道でない。私どもの拙い研究を俟つまでもなく、枕詞や序詞は本邦特有の措辭で、世界の文學に於ける修辭法上格段な地位を占めてゐるものである。而して極めて悠久な傳統を有してゐる。

古事記日本書紀萬葉集を繙いて見るとこの種の言葉が非常に多いのに心附かぬ人はない。八代集などを讀んでも相當にある。近世に於ても古典學者の歌文には多くの枕詞や序詞が巧に用ゐられてあるのを知る。記紀歌集の中には作者や詠まれた場合に多少の異同があり、その格調や内容から見て少しは時代を引き下げて見たいやうなものもあり、また詠まれた當初の形が幾度か改められて傳つたのではないかと考へられるものもないではないが、正史に載せられるに方りてはそれ／＼所傳に基かれたに違ない。今まづ古典に従つて云へば神武天皇の御製には

神風の 伊勢の海

みづくし 久米の子

いすくはし 鯨

島つ鳥 鶴飼が伴

たなめて 伊那佐の山

の如きがあり、日本武尊の御歌には

久方の 天の香山

たみ菰 平群の山

さねさす 相模

たなづく 青垣山

の如き、美夜受比賣の御歌には

高ひかる 日の御子

八隅して 我が大君

あら玉の 年・月

應神天皇の御製には

百傳ふ 角賀 (敦賀)

しなだゆふ 篠並路

香ぐはし 花橘

三粟の 中

の如き枕詞の使用が見えてゐる。枕詞は斯くの如く上代より使用されたもので、吾人が蒐めた千幾百の枕詞には固より新古の別はあつても全體より見渡せば、二千數百年來の傳統を有し、その中の幾割かは踏襲的とはいひながら今の人にも用ゐられてゐる。古典教育に重きを置く英國人などが斯ゝる事實を知つたならば何と感じるであらう。外人のことは如何にもあれ、吾人が史的に考へると斯ゝる言葉の中には皇室及皇室を繞る人々我等の遠い／＼祖先の濇い血が流れ通つてゐると思惟されるではあるまいか。時代の變轉につれ新しい表現を用ゐるのは宜しいが、由緒ある特殊の措辭を棄て、顧みないのは贊成出来ない。抑もこの類の言葉は何の爲に用ゐたのかといふに、吾人は修辭的の目的と直感されるが、その起原に關しては學者間に種々の説がある。その發生から次第にどういふ風に發展していつたかと史的に考へたり、また心理的に眺めて見たりするのは興味深い問題である。枕詞の種類内容形式に關しても仔細に吟味すると述ぶべきことが頗る多い。今日吾人が讀んだり使用したりしてゐる枕詞中には最初これを使用した人の意圖や原義の判明しないものが多い。古來の歌人や學者が注解を下してゐる中には牽強附會に陥つたものも少くない。一つの枕詞の解釋に關しても幾多の説があつてどれに従つたらよいか分らないものが頗る多い。そこで萬葉學者などの中にも、唯枕詞といふだけで語義や接續の本旨などには全く觸れない人もある。それでは他の部合はよく説かれても十分に歌を味へたと云はれない。出来るだけ、その本義をつかむやうにしなくてはならぬ。古人の枕詞に關する説は往年余が公にした枕詞の研究と釋義とに大凡は網羅して置いたが、これらの説を訂正し新研究を築き上げられる若き學徒の續出されるのを望んで止まない次第である。

本講には一つ一つの枕詞につき一々詳説する紙幅を有しないから、名稱の沿革、使用の目的、その起原發達種類等に互り概説し來學を開かうと希ふものであるが、多少歌を詠む人の爲に啓蒙的のことも併せて述べることにした。

名稱の沿革 古代史を繕いて見ると上代高貴の方は勿論、高い文化をもつた人々は大抵歌を詠じてその襟懷をのべてゐて、その中には枕詞を使用してゐる。その初は意識して用ゐてゐても、それを統べる名辭は無かつた。併しその數が段々と殖えまた一人が創めた形が後人によりて踏襲されるに及んでこれに名辭を附することゝなつた。その名づけの親は誰であるか明かでないが、天曆の御時に日本紀開講にあづかつた矢田部宿禰公望の私記には發語といふ名辭が始めて見られる。今日發語といへばか弱いのが、さ渡るのさの類を指すが、そのかみは次の言葉を引起す義として用ゐられた。日本紀開講は養老の當時から始まつてゐるから、天曆以前にあつたのかも知れない。

中古時代には日常の言語から歌言葉といふものが分立する傾向が起つて來て、景物も上代人のやうに境地をかまはない風が止んで、一定の名所と關聯させる徴候が著しくなつて來た。隨つて歌枕といふものも發生するに至つた。一條天皇の頃斯道の權威と仰がれた四條大納言公任は歌枕といふ廣い言葉の中に枕詞を包容させたことはその著新撰隨腦に見えてゐる。

鎌倉時代に出た萬葉學者の仙覺律師は諷詞の字を用ゐ、これをよそへ詞と呼んでゐる。この稱もその起りは平安朝の末期に溯ることが出来るかも知れぬ。金葉集の撰者の源俊賴あたりが使つたかも知れぬ。その和歌祕抄には本文には見えないが、目錄には使つてある。室町時代の始に今川貞世が出てその著落書露顯の中に枕言の辭を用ゐてゐる。一條兼良を始めこれを襲用してゐる。

徳川中期に至り荷田春滿は枕といふは上品でないとし、新に冠辭といふ名目を用ひ、門人賀茂真淵これを繼述し、古學の流を酌む人はこの稱を用ゐるに至つた。尙よそひとか、髻華ウツハとか、かさしとか、頭辭、設詞、瑣語など稱ふべきだなどと説を立てゝゐる人もあるが、近世に於ては枕詞と冠辭との二語が廣く用ゐられてゐる。本講には枕詞の稱を用ゐる。

枕詞の概念 枕詞とは何ぞやといふ問題に對しこれが解答は實に容易でない。久方の天、足引の山など具體的には誰もそれと知ることながら、抽象的にその義をつかみ一般に適用して些の支障もないやうにするは難事である。今まづ形式より説く。普通に枕詞は五音より成るといふ。併し鴉鳥の葛飾、夏草のあひねの濱の如きは上下を離して考察する時、鴉鳥も夏草も共に普通の名辭であつて枕詞といふ意義は存在しない。梓弓春、玉櫛笥二見の浦に於ても梓弓は梓にて作りたる弓、玉櫛笥は立派な櫛笥といふだけで前者と同じく普通の名辭である。上下相關聯し始めて枕詞となるのである。久方の足引の、青丹よしの如きはいづれも一つで枕詞と云はれてゐるが、それは唯因襲的によるに過ぎない。上下相關といふことが絶對的に必要な條件である。

また通常五音といふが、少しく穿鑿すればこれより少いものがあり、大きいものもある。

お	し	て	る	難	波
さ	ね	さ	し	相	模
野	つ	鳥	雉	子	古
つ	ぎ	ね	ふ	山	代
う	ま	酒	三	輪	代

みかしほ 播摩速待 日本紀

しなてる 片岡山

春日の かすが

芦の根 ねもころ

うち亭を 麻績王

空みつ 倭 萬葉集

櫛笥の 二上山

はやさめ くだみの山 出雲風土記

の如きは四音から成つてゐる例で

千葉の 葛 野古事記

八百丹 杵 築 出雲國造神壽詞

の如きは三音より成つてゐる。

木のくれやみ 卯 月

ことひ牛の 三宅の潟 萬葉集

梶の音の つばらく

の如きは六音から成つてゐる。三音四音等は上代の韻文のまだ五七調に一定しなかつた頃に來たもの、若しくはその名残を追つたものと考へられる。私案にはこの他に七音のものも加へる。

沖つ眞鴨の 嘆を音がする 萬葉集

長柄の橋の　ながらへて
伊香保の沼の　いかにして　古今集

これらは五七調に代つて七五調の漸く勢力が加らうとする時に成立したものである。併しその数は極めて少い。以上の諸例によりて枕詞は上下相關的の語で、その上半は三音四音五音六音七音より成るものとする。而してこの七音以下のものは語であるか句であるかといふにいづれの場合もあり得る。例へば

かきつばた　匂へる妹

あづさ弓　春

の如きは語にて

君が着る　三笠の山

妹が手を　とろしの池

あしびなす　榮えし君

の如きは句から成つてゐる。然れば枕詞は詞の字を用ゐ來つてゐるが、語又は句から成るといふべきである。同じく上半が五音から成つてゐても、吹風の目に見ぬ如くとか、大船の思憑みての如く譬喩明瞭な類を世には特に序詞と名づけ、枕詞と區別する學者もあるが、それは枕詞はたゞ型になつた語で踏襲的のものと見做すより生じた考で、吾人は同することが出来ぬ。世人が意味が分らないで型のやうになつてゐる五音の語句といへども、その用ゐた當初は澁刺たる意義を有したもので、上下相關的に用ゐた關繫は一派の學者の所謂序詞との間に劃然たる差別はない。唯一方は尋常の形容詞句又は副詞句の如き觀を呈し、新鮮味の多いといふに過ぎない。これを半枕詞と呼ぶ人もあるがこれ

も妥當でない。もし特別に命名するならばその類を準枕詞と呼ぶ方は宜しい。序詞の稱は別の意に用ゐる。即ち以上擧げたものより長いのを指すべきである。序詞は枕詞の長きものと釋した契沖阿闍梨の説は廣く用ゐられてゐる。吾人は附け加へて枕詞の如くにして上半の二句以上より成るものを序詞とし、枕詞との間に區別を置く。例へば「ながら山、ながらへて」といはゞ枕詞で

さゞ波のながらの山の「存へて君が八千代に逢ふよしもがな

といへば二句の序で、「五百重浪立ちて」は枕詞で

三崎わのありそによする五百重浪「立ちても居ても我が思へる君

の如きは三句序であるが如きで類推される。

次に下に承ける詞を見るに、名詞が最も多く、(敷島の)大和、(みすゞ刈る)信濃、(あをによし)奈良、(ますげそ)蘇我の子、(眞髪ふる)櫛名田姫の如き固有名詞や、(野つ鳥)雉子、(花細し)櫻、(ます竹の)君の如き普通名詞にも幾多の例を摘みあげられる。次に動詞に屬するものは(刈菰の)みだれ、(眞土山)待つゝの類で、名詞の十が一に足らない。形容詞は(蘆鶴の)あな、たづくし、(望月の)たゞはし、(眞木柱)太き、(瑞垣の)久しの類で動詞にかゝるものと伯仲してゐる。副詞に屬するものは(大船の)ゆくらくに、(蘆の根の)ねもころ、花かつみ嘗てもの類でこれも多くはない。句にかゝるものは(さねかづら)後も逢はむ、(塵ひぢの)數にもあらぬ、(雲居なす)心いざよひの如きはそれである。また上から直ぐに接するのと(蘆鶴の)あな、たづくしに於ける如く、語を隔てゝ接するがあり、また(高麗つるぎ)わざみが原の如き下の詞の一部分に連接するものは相當多い數に上つてゐる。そうすると

枕詞は各種の言葉に關繋のあることが知了され、枕詞の範疇や外廓が段々はつきりする。

枕詞は上下相關的の性質を有するに拘らず、古來上半を指していふことが多い。然らばそれがかゝる下半は何と呼ぶべきか從來は定まつてゐない近來これを非枕と呼んでゐる人があるが、この名もふさはしくない。またこれを被枕と名づけた友人もある。これもどうであらう。私には名案はない。よしあるとしても斯ゝる學語は一般に遵用するまでに長年月を要する。併し上下相關の語句とすると、これを統べた名とその上半の名と下半の名とがそれ〴〵欲しくなる。試に愚見を述べて見ると、上半を枕といへば下半は茵しんなどといふも全く因みはないが、現代に於ては然いふ譬辭で命名するも如何であらうから、全體を枕詞とし、上半を起辭、下半を接辭と呼ぶか、或は全體を相關語といひ、上半を枕詞、下半を承詞などと呼ぶも一案であらうと思ふが、本講には從來の稱に従つて置く。

枕詞使用の目的 枕詞は上代人が何の爲に用ゐたかといふ問題は頗る重要性をもつてゐる。古人は多くこれを使用してゐるが、その目的などにつきては別に何等の言を洩してゐない。併し語音の足らないところの埋草に置いたものではない。聽者讀者になるほどと共鳴させる意圖が動いて表現したに違がない。節奏は謠ひ方でとゝのへ、内容に重きを置き、表現を面白く受け容れるにふさはしいやうに企てたものであらう。例へば單に櫻といふより花細し櫻といひ、たゞ橘といふよりも香ぐはし橘と云つた方が如何に言葉が引たつて讀者を引きつけるか知れぬ。知らぬ火の筑紫といへば夏夜一大美觀である有明灣の光景が眼前に浮ぶ、うま酒三輪といへば今の灘地方を忍ばせるやうに、古代に於ける芳醇な酒の産地を思ひ浮べさせる。白栲の袖、釧つく手節の崎などの例を見れば上代人の服飾がそこに見えて来る。白玉の君といひ若草の妻といふ類により、上代人が自分の尊敬したり愛着する人に對してどういふ感じを懷い

てゐたかゞ分る。斯ういふ風に自家の觀察や感想を一定の形式であらしてゐる。それがいづれも枕詞である。して見ると枕詞は修飾的といふことが本源になつてゐる。或る一人が斯の如き面白い表現をなすと、感心してこれに倣ふものが生ずる。斯くて新鮮味は失はれるが、そこに踏襲によつて一種の型が成立する。世人はこの型を呼んで枕詞といふ。併し實はそれは第二義的のものである。一體ある事象に對する感想は人によつてそれ／＼異なる。取り亂した心の悩みを述べるにも、婦人は未だ櫛けづらない朝髪に喩へて「朝髪の思亂れて」といふもあれば、男子は沼澤の畔に刈りてとり散して菰を喩にとりて「刈菰の思ひ亂れて」と吟じ、或は菅の根の入り亂れた狀に比して「菅の根の思ひ亂れて」と謡つてゐる。相類似した表現が各個の人によつて幾つも試みられてゐる中、そのまづいものは漸次に忘れられ、優なるものが多くの人にもて囃される。斯ういふ風に枕詞にも消長が起つたに違ひない。而してある型を襲用するもの「承接に變化を加へ本義にかまはないで種々と展開させて用ゐてゆくものが出て來る。修飾と共に諧調に心をよせるものも起る。これは韻文に於ける修辭であるから、そうなるのは自然の事である。後には諧調を目的としたものも澤山に生ずるやうになつた。例へば「引鳥の我が引けいなば」の如きは頭韻の反覆によつてゐるが、また一面譬喩をかねてある。然るに「たしみ竹、たしに」、「い組み竹、いくみはねず」の如きは單に諧調だけのものである。事象の類似より諧調を利用して他に轉義したものは射扇の實の黒きより甲斐の黒駒に喩へ、黒きより暗きにうつし、暗きより闇に夜に用ゐ、甚だしきは月の如き天體にまで推し及ぼす。要するに聯想を無限にはたらかせるのである。尙諧調的のものも相當古い時代に使用された例があるので、修飾的のものよりも一層古いではないかと考へる學者もある。先哲賀茂真淵の如きも

たと詞の足はぬを整へるより起りて云々

と説き、本居宣長大人も

名所を歌枕といふも一句言葉の足らであきたるところに置くよしの名と聞ゆれば枕詞といふもその説にて云ひ始めむかし

と述べ、本居内遠が

言の調べの思ふままに緩急を得がたき時に言のあやとして立ち入る

と云つてゐるのは第二義的のものに就きての見解ではあるまいか。眞淵は五七の調は天地の調といひ、我が韻文の五七のリズムを絶対的のものとして考へてゐたが、世界の韻文發達史の上から考へても、太古には無定形詩が行はれ、それから種々雑多の型が行はれ、それらがその本來の性質や人々の好尚などによりてセレクトされ、五七調が確立したと見るのが自然と思はれる。萬葉集の長歌の中には縣居翁以下の人々の説いた傾向がないが、最初は上田秋成が冠辭續紹に云つてあるやうに修飾説が正鵠を得てゐると信ずるのである。

枕詞の起源及發達　枕詞使用の目的に關して述べたところはこの項にも多少觸れて置いた。この詞の起原に關して學者の説が隔々である。

枕詞は本邦特殊の修辭であると述べたが、疑もなく我邦自發のものか、或は他より導かれたものかといふ問題を解決せねばならぬ。我文學に影響を與へた漢文學竝に印度文學には同じ類は見えない。私の乏しい研究によれば希臘最古の詩人ホーマーの作中には二三類似のエピセツトがある。その二大詩篇の一つのイリアットの中に「アガメンノン」の事がある。この人にはいづれの節でも「キング・オブ・メン」とアツポジションのやうに附け加へてあり、「ジュ

「ノ」にはマイテイ・クキンといふ形容詞が用ゐられ、足の非常に速かつた「アキレス」には踵を断たれて歩くことが出来なくなつた時でも、前と同じくスイフト・オブ・フットといふ句を附け加へ、またオゼシイの中には朝日の昇る状を薔薇色の指といつても形容してゐる。(以上英語による)このロージイ・フィンカードは我が枕詞の茜さす日と相似通つてゐるが、我が枕詞が決して彼の影響を受けたものではない。或説にはそらみつ倭、あをによし奈良の如きは上代人がこれを使用する時既にその意義が分りにくくなつてゐたので、そらみつといふは倭、あをによしは奈良の義と對譯したものでないかとの説がある。これは先住民か乃至は遠い々々祖先の古語の注釋と見る説で我が韻文には縁遠い感じがある。また我國には同音異義語が多いからこれを區別する爲にとの説もある。かけといふ詞にも鳥の時は庭つ鳥といひ心に掛けるときは玉禰といふが如き、この説明で解されないことはないが、枕詞は多く韻文に用ゐられ、散文には殆ど例のない點から考へて、唯區別する意ではなく修辭的に用ゐたものと見る方が妥當ではなからうか。音調を整へる爲に起つたといふ説は前に述べた。或る觀念を明晰にしたり興味をもたせる爲に譬喩的修飾的に用ゐたといふ説が最も無難と考へられる。

次にその發達展開の跡を考察して見るに、歌集に就いて、その時代の風尚を調べる法もある。また代表的歌人の作につきその傾向を考へる法もある。また一つの枕詞が種々の語句に連接する次第を史的にながめる法もある。そらみつ倭おしける浪速、蘆の根、ねもこ戀は記紀時代には四音であつたに、萬葉集時代にはそらにみつ倭、おしけるや浪速、蘆の根のねもころの如く上半は五音に改められたとか、萬葉の代表的歌人の柿本人麿や山上憶良、大伴家持等是如何なる枕詞を用ゐたとか、また足引のといふ詞が古事記には山田と續けたのを始めとし、萬葉集には山下、山邊、深山、

荒山中、尾上の外山橋、山椿、山櫻花、山澤人、山の雫、山下水、片山雉子、嵐と續け、六帖には八尾の雉子、倭續牛と續け、後撰集には病、拾遺集には葛城山、堀河百首には耳梨山、夫木集には笛吹山と續けた類の例を考へ、始は唯山といふに掛けたのが、六帖や後撰集時代にはやまの音を語頭にもつてゐる倭とか病などに掛け、拾遺集頃よりは固有名詞に續けるやうになつた變化を來たした事實を知り、又海人小舟は萬葉には泊瀬の山と連ねたが、金葉集には乗りといふより法にかけ、壬二集には二十日の月、雪玉集にははつかに、鷗巢御集には初雪と續けてある例からそのうつりかはりも考へたりして將來どういふ風に續けてゆくかとの参考に資したり、また枕詞の上半にとつてある物類事象を検し、これを材料にとり入れた歌人と環境とを文化史的に考察する法もある。黒い形容に小さな射扇の實をとつたとする時は上代歌人の住んでゐたあたりにはあゝいふ草が澤山あつたか、或はそれを見て珍しとしたか、射目立てゝ跡見の丘の枕詞は狩獵主活の面影を見せるとか、うつゆふのまさき國の枕詞は蠶業の事から聯想したとか、鈴が音の枕詞は驛遞の狀況を窺ふものとか、すぐろくの市場の枕詞は王朝時代に行はれてゐた遊戯の具と日常生活とを結合して考へるといふ風の考察もある。さういふ種々の研究法を細に入り微に互つて説くことは茲には出來ないから、唯記紀時代、萬葉集時代、三代集時代、近世などの大要を述べるに止める。

茲に記紀時代といふのは大化改新以前を指すこととする。この時代の枕詞は凡そ百二十あつて、その中十三種は古人の用ゐたものをそのまま襲用してあり。その七種は承接をかへたものである。それらを検して見ると種々の形がある。

一、鳥の種名をいひ出す爲にその大きい類の名を冠したものである。野つ鳥雉子、庭つ鳥家雞、鳥つ鳥鶉、沖つ鳥鴨

二、人の徳をたゞへ物の優れたのを褒める賞讃の辭を加へたもの、八隅しゝ我大君、高光る日の御子、みづくし久米の子、花ぐはし櫻、香ぐはし橘、

三、土地の狀況を形容したもの

たゞなづく青垣山、しなてる片岡山、おしてる難波、

四、土地の特なものを擧げてその所をあらはすもの、うま酒三輪、みかしほ播磨、つぎ根ふ山城、青丹よし奈良、

五、譬喩をあげたもの

白玉の君、ぬえ草の妻、朝日の笑、桤紺の白き腕、根白の白き腕、うば玉の黒き、さゝがねの蜘蛛、

刈狐の亂る、鳩鳥のかつく、山たつづの迎へ、

眞玉なす吾思ふ妹、鏡なす吾思ふ妹、冬木のす枯木、

ししじもの水くゝ籠る、

まごきつらあざなはり、岩くやす畏く。

六、聲調を整へる爲同音を反覆するもの、

引鳥の我引け往なば、群鳥の我群れいなば、いくみ竹居組み、たしみ竹たしに、

七、同音より他に轉義するもの

高行くや準別の命、眞髮ふる奇稻田姫、つぬさはふ磐之姫、疊こも平群の山、夏草のあひねの濱、菰まくら高階。

この他にも種々の形がある。以上の中同音より他へ轉ずるが如きは技巧を凝したもので、急劇の轉換によつて他の快感を買ふものである。また鳥瑟の黒き衣より轉じてうば玉の甲斐の黒駒と用ゐたり、つぬさはふ高多くはよ聲磐乃姫と磐余いはれ

の池と兩様にかれたり、若草の妻と續けたり又若くと同音を繰り返すが如き、一二の展開は既にこの時代から見られる。但し枕詞にはさきに擧げた足引の山に於ける如く學者により解釋を異にするものが少くない。久方の天の如きそらみつ倭の如き、神風の伊勢の如き、青丹よし奈良の如きもそれ／＼異説があつてその語義のとり方によりて成立關繫に變つた見方が生ずるのである。

次に萬葉時代は長歌の隆盛であつた期間とて、枕詞の使用が詞の使用が頗る多く、新創の枕詞は二百十餘これに上の五言は同一であつて承接を異にしたもの百八種を加へると、實に三百二十に達する。新創の作家は柿本人麿を始め大伴家持、阪上郎女、山上憶良を主として山邊赤人、笠金村、大伴旅人等がある。

この時代には譬喩に屬するものが殆ど九倍にも殖えて來て、のなすじものにて終るものも相當にあるが、「天つ水、仰ぎて」「蜷のわた、か黒き」の如き隱喩の類も増して來た。音韻の反覆に由るものは十倍以上に増して「蘆穂山あしかる咎」「飛鳥川明日も」「吉城川よしも」「菅の山、すがなく」などいへるが如き地名を利用するものが生じて來た。同一の語にかけるにも人により場合によりかへていつた趣が見られるものが多い。例へば思ひみだれといふ語に「玉の緒の」、「刈草の」、「蘆垣の」、「菅の根の」、「朝霧の」、「とき衣の」など様々の枕詞が生じて來た。聯想によるものや轉義によるものも増して來た。「我心清隅の池」、「居待月明石」、「海小舟、泊瀬山」の類が目に着く。數に關した枕詞例へば「百足らず、筏」「百足らず、八十隅阪」「百傳ふ、磐余」の如き理智的な類も殖えた。五七調の統一につれ、上代に四音であつた枕詞に一音を添へたもの、例へば野つ鳥をさぬつ鳥、おしてるを押照るやと改めた例も

存してゐる。これらは善いとして「そらみつ倭」を「そらにみつ倭」と改めた如きは枕詞の原義をつかみにくくした嫌がある。またこの集には十四及二十の巻に東歌が集めてあつて、邊防をかためる爲に出でたつ東男兒の詠んだ中には「ぬば玉の」を「むらたまの」と謠ひ、「疊ごも」を「疊げめ」と詠じた訛つた枕詞も人の目につく。また大きな作家の用ゐた枕詞を検して憶良はよく動物をとり入れ、阪上郎女は女流作家の事とて玉や鏡等の裝飾品や色彩に關したことを取り入れて枕詞としたなど細に研究して個性の心的作用と作物の關繫をたどつて見るも面白いと思ふ。

次に平安朝時代になつてからは長歌の衰頽と共に枕詞は少くなつた。それでも三代集を通じて見ると二百七十種ぐらゐはある。紀貫之、凡河内躬恆等が多く使つた方であるが新勅のものには十種にも上らない。この時代の短歌には譬喩の優れたものが多くまた枕詞が大に發達したが枕詞にも同様の傾向がある。譬喩に用ゐた枕詞は六十九種に達してゐる。尤も萬葉に用ゐた……じものゝ類はすたつての助詞で比した類が大部分を占めてゐる。尙五首から成つてゐる枕詞を細かく分析して見ると二三の結合に成るものが殆ど全部だといつて宜しい。例へば夏衣、濱衝、朝水、花薄等に於けるやうに。古今集以下の勅撰集を見るに四季の部には諷詠する景物は美しいもの優しいものなどに限られて來て、萬葉集のやうに觸目する何でもを詠むといふ風と變つてゐる。枕詞もそれと同じく優美な類をかざつて用ゐ、それを様々に面白く續けてゆく。高橋殘夢は石上枕詞例に「古今の頃に至りて古事記日本紀萬葉集中に最多なる枕詞を十に九を捨て、足引の、久方の、百敷の、垂乳根の、空蟬の等雅びたるを纒にえり出でて最も巧にも雅にも用ひなせるいよまぐはひなるを好まれたるなり」と云つてゐるのは當つてゐる。聯想によりそれからそれへ轉義してゆく。反言すれば枕詞を出来るだけ活かすといふのがこの頃の風尙であつた。

唐衣たういびもゆふぐれになるときは 返すくぞ人は戀しき

に於ける唐衣といふ枕詞は衣の縁の紐結ぶを同音の他語に轉じ日も夕暮と續けたばかりでなく、衣の縁語のかへすを返すくといふ副詞に利かせてある。

逢ふことをいざほに出なむしのずまき 忍びはつべきものならなくに

のしの薄は同音忍びに掛るばかりでなく、あらはといふ意味のほに出るといふに利かせてある。想の上よりいへば從であるべき枕詞が陰で働いて一首を支配してゐる傾がないでもない。

池水のそこにはあらでねぬ繩の くる人もなし待つ人もなし

の如きは「池水の」枕詞は底の音からそこもとのそこにうつし、ねぬ繩(即ち蓴菜)は繰るを來るに轉じてあつて、一首中に二つの枕詞を使ひ、それがまた相關的で離れないやうになつてゐる。

津の國のなには思はず山城の とはに相見んことをのみこそ

の如きは二つの地名を枕詞として用ひ、難波に何は、鳥羽に永久とほをかけてある。

別るれば心をのみぞ筑紫櫛 さしてあふべき方を知らねば

の如きは筑紫櫛はさしへ掛る枕詞であつて、而も上二句に對しては盡すといふ説定語を兼ねてゐる。かう器用に使つてあるので筑紫櫛は枕詞であるや否やの問題も起つて來る。此等の歌は枕詞を中心に秀句と縁語で仕立てたもので枕詞の活用はこゝに至つて窮るといつて宜しい。

物は極度にゆきつめると變ずる。三代集以後枕詞の用は少くなつて來て鴨長明の如きは昔は實用に供したものが後

には唯かざりばかりになつた半臂に枕詞を比し、良少將が仁明天皇の崩御を悲しみ剃髪した時の作

たらちねは斯れとてしもうば玉の わが黒髪をなでずやありけむ

のうば玉のを半臂句と名づけてゐる。そうして枕詞は第一句に置くのは格別でない。第三句即ち腰句に置くが善いと云つた。

徳川幕府時代になつて古典研究が盛となり擬古文が尙ばれるに及んで、枕詞や序詞が散文の中にも多く使用される新傾向を生じたが、序詞には新しい作があるが、枕詞は舊に由つたものが多い。尤も承接は新しいのが少くない。その作者は圓珠庵契沖、賀茂眞淵、本居宣長、荒木田久老等縣門の人々、栗田土満、本居大平、齋藤彦鷹の如き鈴門の人、加納諸平、鹿持雅澄、和田嚴足、六人部是香等々これを作つた人が相當にある。明治時代に多くこれを使つたのは郵岡良弼氏である。彼の甲信紀程には新舊合せて八十種も使用してある。更に眼を轉じて一つの枕詞が如何にうつり變つていつたかといふことを梓弓といふ一語につきて考へて見る。

萬葉には

音に聞き、

引き、つまひく、引津の野邊、ひき豊國、

春、

よらの山、

末、末野、周准の珠名、

八代集等には

鶴の聲 古今六帖

磯邊 古集 おして春雨 同

入佐の山 後撰集

遙に 拾遺集 思はず 拾遺集

かへる 後拾遺集 伏見山 同

鎌倉室町時代の集には

一志の浦 新勸撰集

引手の山 夫木集 小鹽山 同 敦賀の山 同

矢田の廣野 玉莖集

入野 風雅集

矢野の神山 續拾遺集

八十の湊 草根集 入江 同

猪名野 國章

居待月 後花園院目次

田舎 雪玉集 八島 雪玉集 彌生 同

江戸時代の集には

大和國 歸風集

八幡 老槐集

枕詞と序詞

心強く 元文書肆

伊駒高根 久老集

はらみの山 山齋集

此等は唯心附いたたけのもので、尙拾へばあるかと思ふ。弓の縁語で引くより引津引野と地名へうつし、引とよもすといふより豊國へ、張るといふより春、遙に、押張るより春雨、小鹽山へ、射るより八佐山、入野、入江、磯部、磯間の浦、一志の浦、猪名野、居待月、田舎、伊駒高根、歸る、心強く、よらの山、伏見も縁語で、また弓の部分の末より末野、周准へ、弦より鶴の命、敦賀の山、筈より思はずへ、關係ある矢より矢田の廣野、八十の港、矢幡の神山、大和國、八島の外、八幡の峯、彌生、屋蔭の里へ轉じたり、一つの枕詞が四十幾つに用ゐられてゐる。その範圍の廣汎に驚かざるを得ないのである。

以上で枕詞の起源沿革の一斑を了することが出来ると思ふ。徳川以降の人々の用ゐた枕詞は主として長歌に就て調べて見たのであるが、地名に掛けたものが多い。契沖は五、眞淵は十三、宣長は十、土満は八、大平は十一、彦麿は八、諸平は十、鹿持は十七、是香は五の地名に冠させた枕詞を用ゐてゐる。上代人が「そらみつ、倭」「つぎねふ、山城」「おしてる難波」「神風の、伊勢」「うちえする、駿河」「さねさす、相模」「さゝなみの、近江」「しなざかる、越」「八雲立つ出雲」「つづねさはふ石見」「みかしほ、播磨」「まがねふく、吉備」「あさもよし、紀」「玉藻よし、讃岐」「知らぬ火、筑紫」「梓弓、引、豊國」の如く國名に掛けたものや「玉櫛、畝火」「大伴の、御津」「燈火の、明石」「白鳥の、鳥羽山」「高くらの、御笠の山」「白雲の、立田」「まそ鏡、敏馬浦」の如き地名にかけたものを

可なり澤山に遺してゐるやうに、近代の人も自分の住地若しくは遊歴した地方にある名山大川靈地勝景等をとつて枕詞を作ることを忘れなかつた。今後も自家のめぐりにある風物をとつて諷詠することは止まない。随つてその地名を生かして枕詞に用ゐることはすたらぬであらう。古來都に遠ざかつてゐた田舎では歌人が出てその風物山川等を謡つてくれなければ郷土文學は決して起らない。越中に二上山、布勢湖、石瀬野、畔田など歌枕の多いのは大伴家持の如き歌人が任にあつた爲であらう。斯ういふ意味から見れば枕詞は郷土文藝に交渉が少くないとも云はれる。斯の如き第二義なものは別として僅々五音内外から成る句が上下相映帶して格段な風趣を添へ、或はその句劇の轉換によりて輕快味を感じしめる國文學特殊の措辭である。一體イデオムは外國人には分りにくい、これを使用するものには特別な味がある。文學に用ゐる語句は唯思想を達すればそれで十分とは云はれぬ。ふさはしい語感といふものが伴はなくてはならぬ、我が枕詞が吾人に云ふべからざる語感を提起させることは否むべからざること、このイデオムチックな表現は舊套を追ふに止まらず、新しいものをも作り得べきではあるまいか。

枕詞新作問題

詠歌にあたり枕詞の使用如何といふ問題に就いて少しく附け加へて置く。現時新しい歌を詠む人は全くこれを用ゐない。アラ、ギ一派の人は古い枕詞を妙に連ねる傾向が多いといふ人もある。管見によれば、枕詞を生かして用ゐることは今も結構と思ふ。また環境に應じて新造して使用するも宜しいと思ふ。故高崎男爵が、或る年の暮から新年にかけて靜岡縣の志田温泉に行かれた中村秋香氏に贈られた和歌に、「裏白のしだの出湯に」云々ともものせられたといふ。季節の裏白を枕詞に用ゐられたのがよく利いてゐる。斯ういふ風に枕詞は新作するのは極めて面白

と思ふ。

ある語にかゝる枕詞を詞草小苑や冠辭例などで引いて見て手當次第に使用するのは唯因襲的に運ぶだけで歌の新味も何もない。これにつき契沖阿闍梨の詞草正採抄を借りて少しく説明を試みる。同書に挙げた例は約七百を算する。

その中、事項別に數を擧げると次の如し。

神祇に關するもの……………七	身體に關するもの……………十五
天象……………十八	宮室……………十六
地儀……………二百五十八	器用……………二十九
時令……………十九	動植……………十三
人倫……………八十三	聲色……………十一
人事……………百二十七	通用……………八十二

神祇部に於ては、五十鈴宮には鈴に關繫のある「折釧まがくち」を加へ、出雲の杵築宮には築にからませて「八百土やほによし」を、山城の賀茂社に「千早振」を加へる。一般に神威の高い神には「千早振」を、惠の厚い神には「魂ちはふ」を以てする習である。古式の神社では矢張古い枕詞がふさはしいが、宮々によりて特殊の有様を枕詞とするも宜しいと思ふ。周垣の立派な場合には玉垣のと置き、野宮ならば柴垣のと冠らせたり、八幡宮ならば鳩つどふとか、春日社ならば鹿の立つとか、熊野神社なれば鴉なくとか、稻荷社には命婦すむとか住吉神ならば海しらすとか、高皇産靈神には從來用ゐ來つた菰枕の代りに高知らす又天しらすなどそれ々々工夫して新造のものを以てして然るべきであるまいか。從來のまゝではあまりに乏しい感じがする。神祇に對し寺院などに關するものは古くは見えないが諷詠すべきものは多々あると思ふ。修飾的な句を二三擧げて見るならば、塵とめぬ僧の庵とか、墨染の袈裟とか、木魚鳴る堂とか、

磬を打つ蓮座の下とか、聯かゝる門とか、木の芽煮る庫裡の奥とか、御佛の影向ふとか、手向する阿伽の棚とか、船よする彼方の岸とか、道くらき六つの巷とか、闇てらす門火とか云つた類が擧げ切れない程で、斯ゝる類を利用して幾多の新鮮味に富んだ枕詞を作ることが出来ると思ふ。

以上の如き信仰とか宗教とかの方面とちがひ、自然界を見渡すに、從來は天象は天、日、月、雲、雨、風、嵐ぐらゐで、それも久堅のを以て天でも日でも月でも雲でも雨でも同じやうに掛ける。日にはまた茜さすとか天傳ふを用ゐる。これらは色彩の美や運行の状を述べて面白い枕詞である。月には別にぬば玉のを以てする習であるが、起源に溯つて見ると、ぬば玉は射扇ひやふぎの實で眞黒いものであるから、黒きものゝ譬喩に用ゐ、それから暗きに、更に闇に夜に、夜渡る月に、單に月にも續けたもので、言葉の轉移していつた状を見るのには面白いが、ぬば玉の清き月夜の例などは萬葉人使つたとはいへ、語源を考へると不調和である。外に表現の方も種々あらう。三日月ならば畫く眉のとか、眉びきのなどを用ゐ、上弦及下弦の月ならば弓張のを用ひ、満月ならばます鏡を用ゐ、一般の月ならば傳説により兎とぶとか桂光るなどと云つても宜しいのではないでしょうか。星は天上の花の如く美しいのにあまり歌に詠まれない。牽牛星の彦星か、棚機か、明くるに掛ける明星のと用ゐるに過ぎない。枕草子に「星はすばる」と擧げてあるが、歌に枕詞には用例が見えない。彗星の出現は昔の人には災異の暗示として恐怖の種となつてゐたがこれも歌枕に見えない。今は天文の研究も大に進んで來て大熊星かどうの、乙女星がかうのと小さい人でも彼是云つてゐるぐらゐであるから星の歌も多く詠み、それを躍動するやうな枕詞を用ゐてもよいと思ふ。明星には聖おもふとか、すばるには六つ星のとか、北斗星ならば極をてらすとか南なきとかそれ／＼工夫があるべきであらう。彗星の如きも吹きはらふ彗星と

か、さが見るとか、けちぎりのなども云はれないことはあるまい。雲の如きは久方の雲ばかりでなく、その姿や色など多趣多様の變化をとらへて様々の枕詞も案ぜられるであらう。望たかき青雲のとか、墨流す夕立雲とか、綿のこ
と累る雲とか、月宿す雲とか、御空ゆく雲とか、鱗なす雲とか種々相がそれ／＼詠まれると思ふ。

次に地儀に於ては足引の山、眞木立つ荒山、眞草刈る荒野、石ばしる瀧、いさなどり海、濱、玉藻刈る沖、たぐひれ栲領巾の波、荒金の土、久方の都、天さかる鄙、玉鉾の道等の外はあもりつく天の香山、遠つ人松浦川の如き固有名詞にかけたものが約二百に及んでゐて、地名にかけたものが如何に多いかといふことが知られる。旅行すると従來人の諷詠しない土地山川湖海動植に接することが多い。それらを詠むに方り枕詞を以てすることが古人も多かつた。今人でも同様のことが多い。村岡良弼の甲信紀程には新古の枕詞を用ゐたものが八十有餘に及んでゐる。中に

天 翔 る	都 留 の 郡	た つ くり を	更 科
根 芹 つ む	田 中 の 里	神 祭 る	杵 淵 の 村
瓦 葺 き	寺 尾 の 城	言 さ や く	鳥 川
下 萌 え の	蕨 の 站	さ し 櫛 の	赤 羽
穂 波 よ る	田 端		

の如きがある。斯ういふ風に今後も地名にかゝる枕詞は多く發生するであらう。

動物に於てはいすくはし鯨、野つ鳥雉子、家つ鳥かけ、遠つ人雁、島つ鳥鶴、沖つ鳥かも、高ゆくや隼、さゝかねの蜘蛛、大魚よし鮪の類、植物に於ては花ぐはし櫻、さにづらふ紅葉、うまし物あべ橋、茜さす紫の類でその數がさほど多くないのは古に詠物歌が多く詠まれなかつた爲であらう。今後は種々の動植が詠まるべきであらう。咄嗟の思附

で雅正でないが、秋の七草の中の萩には手弱女のと置き、薄には穂波よるなど、藤袴には藤にちなんでゆるしの色を加へ、女郎花には粟飯のを以てし、萱には利録とりなどを冠らせ、桔梗にはむらさきのを以てし、朝顔は七草考などに説がいろ／＼あるが、假に今いふ朝顔ならば露に咲くとか光満つとか兎に角一首の上に風趣のあるやうに詠じて然るべきである。植物は花の色、葉の状、枝振、それに伴ふ傳説などその特色をとらへたり、或は縁を求めてその語の一部分に懸けるなど工夫は多々あるべく、動物に於ては昔見なかつた類が實地に目撃されるものが多くなつたし、飼鳥の如きもその種類が昔より餘程多く植え、昆蟲の採集なども益盛んになつたから、これらも種々と詠まるべく、歌人が想を凝して新しい措辭も自ら生るべきであらう。

人倫人事部は地儀と共に古來多くの枕詞が使用された。中に人倫部で一般に關するものは君と妹との二つが最も多く、大君、日の御子が多く、次に父母妻子弟、日嗣の御子、大宮人、舍人も少しは詠まれてある。八隅し、我が大君、高光る日の御子と稱へ詞を用ゐ、ち、のみの父、柞葉の母と音韻反覆の法を用ゐたり、刺竹の君、若草の妻と喩譬を採つたりして枕詞となしてある。刺竹のは大宮人及舍人にも充用され、一人子は鹿子じものと比擬され、弟は愛し對ふと形容詞句を冠らせてある。以上はその數も多くないが、人名に懸けたもの例へば旗すゝき久米の若子、眞髮ふる櫛名田姫、大舟の津守、つぬさはふ磐之姫の如き類が頗る多い。これらは名の一部分にかけて義を轉じてゆく爲に滑稽的な感じを起し易い。身體に關したものは顔、胸、腕、肩、肌、髪、鬚等で、ぬば玉の黒髮、降る雪の白髮、あからびく肌の如く色彩で示したり、望月の足れる面輪の如く感じを述べた類が多い。その總數は多くはない。この類にも今後新しい枕詞が生じてもよいものが澤山ある。

宮室器用の中宮室部には宮、家、嬪屋、飼屋、板戸、床等十指を屈するに足りない。即ちうちひさす宮、百敷の大宮、敷妙の家、床、枕づく嬪屋、朝霞かひや等にそれで、器用部では衣、袖、襷、紐、梓弓、幣、小囊、鐸、篋、唐臼、小簾及綾、錦、布、木綿の類で、衣類に關したものは白袴の衣、荒袴の布、くれはどり綾、さゝらがた錦の如く、原料とか模様等よりいひ、手回種幣、御執らしの梓の弓、百傳ふ鐸の如くその性狀を修飾的に用ゐ、或はさへづるや唐臼、百足らす篋、玉垂の小簾、玉垂小囊の如くある音の續きから他へ轉じた類の枕詞を用ゐた。宮室器用はいやが上に様々に詠すべきものが多くなつてゐるから、以上のやうな構成法を用ゐて、新しい枕詞をも作つても悪くない、正採抄には通用部及人事部には動作とか思念とがその情趣などをあらはす語を擧げてある。それによると動詞にかゝるものが多く、副詞にかゝるものがそれに次ぎ、形容詞にかゝるものは割合に少い。

朝日	の	ゑみ	榮え
朝髪	の	思ひ	亂れ
玉かづら		絶	ゆる
朝霜	の	消	なば
大船	の	たゆ	たふ
玉藻	なす	浮	べ
くらげ	なす	漂	ふ
檜柴	の	馴	れ
立田山		立ち	て
壘	こも	隔	て

の如き動詞にかへる例でその多くはのなす等によりて譬となすか、同音を反覆するか、類音から他へ轉じゆくのである。

雲居なす 遠き

岩橋の まぶかき

月草の 移ひ易き

瑞垣の 久しき

の如きは形容詞にかゝる例である。

うまごりの あやに

かぎろひの ほのか

櫻つばきの木の つぎぐに

梶の音の つばらく(音)に

花かつみ 嘗て

の如きは副詞にかゝる例である。以上の諸例で各部に互つて雅馴な例に則り自在にこれを用ふべきことが分ると思はれる。

枕詞の語釋

枕詞の中には上下連接の意義の極めて明晰なものと、然うでないものがある。意義の不同瞭なものは皆悉く古い時代に成つたもので、その數は多くはない。ひさかたの天、足引の山、そらみつ倭、あをによし奈良、神風の伊勢などはその著しい例である。これらは古來幾多の學者によつて解釋を試みられたが、今日尙疑問があつて解

決に至らない。そこで枕詞は意義のない詞として語釋には全く觸れない學者もないではない。併しそれには賛成出来ぬ。よし舊來の説は誤謬があるとしても、將來それらの説に基いて新説が確立しないとも限らない。契沖や眞淵の如き先哲を始め種々の學者が出で、種々の解釋を試みてゐる。それらは一應見なければならぬ。今私の舊著枕詞の研究と釋義中から異説のまち／＼である枕詞を十種抽きて若き歌人や新しい語學者の參考に供し、新説を樹立されることを冀ふのである。

ひさかたの 天 ・ 月

古事記には天の香山に續け、日本紀には天の金機に連ね、萬葉集には天の原、天の川原、天つ御門、天つ宮、天の戸、天路、天つ瑞、天照る月など天の語には何でも續けてある。

その上半の語義につきては萬葉集に久堅又久方と書いてあるに基き、天ばかりはいつまで経つても變りのない空と説く説が古くから行はれてゐる。藤原仲實、仙覺律師、契沖阿闍梨等平安鎌倉徳川初期にかけてはそれで通つて來た。尤も下河邊長流は前説の外久方の字に従ひ、天地の二方をいはゞ天は久しき方と云はんも違ふべからずと附加へてゐる。

契沖は萬葉代匠明の精撰本には長流と同説であるが、貞享四年に著した詞草正採抄には天の形は圓くて虚らなるを匏の内のまろく虚しきに譬へて匏形の天といふならんと云つてある從來の説を覆してある。吾等は冠辭考により續日本後紀の瓠葛の天をひさかたのと訓じたのは荷田春滿で、葛は象の義であると冠辭考に新説を唱出したと考へて居たのは契沖が夙く唱へたことを知つた。その門人の建部綾足は師説に基き、瓠葛は書紀及祝詞にも見え、伊弉册神の

お生みになつた天の物であるからそれにかゝると附加へた。

縣門の一人荒木田久老は狐の説によらないで、分り易く日刺方と新説を立てた。ひさを久また狐に見ないで日と立てた説は藤原武良由の證歌附には日離るの義とし、高橋殘夢の石上枕詞例には日擴り騒ぐ方天と説き、上田秋成は續貂に考の師を甘なひながら、一説として日のすむ方の天を約めて云ふといひ、また衣妙舎主人は日の幸ひます方の意に説いた。此等はひさのひだけが同一で他は段々と分生したやうに考へられる。

萬葉古義の作者鹿持雅澄は眞淵の説から出て、ひさかたは提勝間の義で、かたはかつまの約、天を網目の意にとりなして提勝間の編目と別説を唱へ、黒川眞頼の古今冠辭考にはひさがつらの青若しくは青見に續けたと説いた。

橋守部は稜威言別の中にひさかたのひさは日隅宮のひすと同じく、幽冥の潛み隠れて目に見えぬ方といふ續かと述べてゐる。古くはひさかたの部につきて説を立てゝゐたのを近世には天の語義を考へ種々と説いた。

尙枕詞を外國語（希臘語）で説かうと企てたのは木村鷹太郎で、氏は久方は日高、ひぢかたと共に希臘語のピタコスより導かれたものといひ、ピタコスは源泉滾々と湧き出づる意味だと説いてゐる。以上の如く諸説があつて一定しないが當初用ゐた人はあまりむづかしく考へさせるやうな表現はしなかつたと思ふ。

あしびきの 山

あしびきのは古事記には山田に冠らせ、日本紀にはてある。此傍山に續けてある。萬葉にはその文字が足日本乃、足氷木乃、足檜木乃、足引乃、足疾乃、足比奇乃、蘆檜木笑、足比木乃、惡氷木之等種々に書かれてある。

あしひきをあしとひきとの二語の結合と見る説（甲）とあしびとときとの二語より成るといふ説（乙）とあとしびきと

の二語より成るといふ説(丙)あしとびときとの三語より成るといふ(丁)等の説がある。

日本紀私記には山行には足を引きて歩する故といひ、定家は上古我國は沼澤地が多く、蘆が叢生してゐた。それを引捨てたのが山となつたといふ蘆引説を奉じ、仙覺は自説を述べるに先ち或抄を引き四義ありとて、一には三方沙彌が悪日に山を越し大雪に會つた故事により惡日來の説を、二には推古天皇山に狩し杭を踏み御足を傷け引きずり給ふた説を、三には印度の一角仙人が山にて足を痛めたといふ説を、四には蘆引説を紹介し、次に山の音を分析し、やは高き義、まは圍むる意、あしびは山齋と書しよく榮える樹であるから、山齋木の山の義と新説を立てた。

賀茂真淵はしびきは繁木にて、あは天か青かもしくは足の義かといひ、後考には生ふ繁木の山の義と改め、楯取魚彦の冠辭懸緒には朝日刺す木の山と説き、鹿持の枕詞解には茂檜木の山の義といひ、本居宣長の古事記傳には山脚の引いた城まきの山の義に説き、黒川真頼は令生美樹あしか大茂木あしみきの山の義かと述べてゐるやうに是も説が多い。殘夢の山の形勢と説くが如きは解し易い説である。

そらみつ 倭

由阿の采葉抄には饒速日命が天の岩舟に乗り葦原國を見給ふとて虚空を飛翔し給ひしよりいふと、傳説的の注釋を下し、鹿持の枕詞解にはみは美稱で眞津の義、饒速日命の磐船を泊てさせられた津の義と解し、橘守部は稜威の言別にそゝり満つ山跡國即ち天に聳ゆる義といひ、石上枕詞例には空に滿つる山の義とし、木村鷹太郎は羅句語のソルニミス即ち日光過多の義であると異説を立てた。

あをによし 奈良

あをによしはあをにとよしとの結合と見ると、あをにとよしと三つの結合と見ると、あをにとやしとの結合と見るとで説が異なる。更にまたあををを分析し、にを名詞に見ると助詞に見るとで説が變り、あをにその物に就いての見解も區々である。

あををに青丹と萬葉に書いてあるのに由つて、奈良の都の美觀を色彩の美で喩へたといふ説は藤原清輔の説であるが、仁徳紀に作例があるからこの説は正當でない、あをには顔料と見て、古奈良から産出したので、土地の名物をまづ擧げてその土地を著したと見る説は平安朝人の説で、無難な考である。而して袖中抄には青土の繪具といふ萬葉抄の説を引き、代匠記には萬葉集卷十三の長歌により綠青となし、古事記傳には畫眉の料の青土となしてある。然るに守部の萬葉檜栴には蒼土あそにの義にて一般の土といひ、奈良豆比古神が山をほり谷を開き平らにしたことゝ結び付けて説いた。黒川眞頼の大神あそに説もこれに類似してゐる。これらは名物説と異り奈良の語義に結び付けた考である。獨り荷田春滿はにを助詞と見て、青によき檜といふより奈良に轉じたといふ新説を立て、また一傳としてにを瓊にの義となし青珠あそに善き檜ともいつてゐる。

青土説とは別に青瓷あそに説、青帛あそに説が古く唱へられた。崇神紀に那羅の地名傳説が載つてゐて大彥命等が叛將を撃つ時に忌瓷イハヒをすゑて神を祭つたことと軍士が集屯して土地を踏み平らしたといふことを擧げ、忌瓷は青瓷を上等とするによりて青瓷美奈良と續けたと云ふ説が袖中抄に擧げてある。仙覺はあをに青帛あそにで、にぎてはなら〜と纏るもので奈良と續けたといひ、また別説に檜の木は若葉若枝が他木よりしなやかでおのづから風が吹き來ると纏はれ易いから奈良へよそへ續けたと説いてゐる。春滿の説は仙覺の説に由つたのである。

賀茂眞淵は八百丹杵築の枕詞から考へて、あをには彌百土の義となし、よしは呼び出す辭のよにしを加へたものに、土を平らす義より地名の奈良へ轉じたとした。守部及眞頼の説は眞淵に據つたものである。鹿持は青土黏しと釋し考の說に反對した。泥物を作るをねやすと古語を引いてゐるが如何であらう。

この外に荒木田久老の槻乃落葉にはあをによしはあなにやしと同じく、あなは數言で、にやしはにの助辭にやしの添へるもので、やはよと通ふ言で奈良の地を褒めて云つたと釋し、和歌詞譜にはあをによしは遇ふに吉しで、奈良といふ語には善とか賢とかいふ義があるなど種々の説があるが信じ難い。

神風の 伊勢

神風の伊勢と續けたのは古く神武記に載つてゐる。かんかせを神風と見る説、神下り瀬といふ説、神饌稻とする説がある。伊勢に續けた意も種々に説かれた。文字通に神風と考へる中にも古く綺語抄には神の恵といつてある。鴨長明もその説を奉じた。顯昭は威風徳風など風に喩へて神徳のひろきをいふ。伊勢は皇太神の天降りました所だからといふ一説をも擧げてゐる。仙覺は伊勢津彦が大風を起し波に乗つて去つたといふ伊勢風土記の記事を引き、神風伊勢と續けた所以を説き契沖は猿田彦の事を引き、風は天地の使で君子の徳にも比し、大神宮の御勢自ら風となる故に神風の伊勢といふといひ、また壽命は息風で大神の神徳外には風となり内には壽命となる故に神風の伊勢といふといひ、眞淵は風は神の息であるから神風の息のいの音から伊勢に轉じたといひ、田安宗武は神風の罪を癒やせるものとし、いやせのせが省かれていせに懸るといひ、本居太平は伊勢は餘國にかはり風強くまた度々吹く國であるから、知らぬ火筑紫などの例であると説き、守部はその國に風神鎮座あり靈驗あらたかて天武天皇の時神風の吹いたことを擧げてゐ

る。神かぜは神が瀬の義であるとの説は平安朝時代から存してゐた。奥儀抄には磯宮は太神の始めて天より下り給ふ所でそれよりいふと説き、鹿持雅澄は兩説を擧げてゐる。その一説には風は借字で神下瀬のくだがかとつまつたもので、せは場といふが如し。伊勢も五十鈴も磯も皆同言のうつるひで五十鈴河に由る名であらうと述べてゐる。併し雅澄は一説としてかんかぜは神風で、伊勢と受けたのはいすかしいすきなどと同じく物の平穩でなく甚しいのをいひ、そのいすけしが約まつて伊勢となつたのかも知れぬといひ、荒木田久老はかんかぜは神饌稻であると説いた。請取りにくい説である。

つぎねふ 山城

記紀に山代川などと續けてある。燭明抄には萬葉集に次嶺經と書いてあるのにより、山の嶺々次ぎてゐる山城と説き古事記傳にはつぎねふは繼苗生の義、なへを約めてねとなる。繼苗とは山の樹を伐り取つた跡に樹を生し立てる爲に植ゑる苗をいふ。生はその苗をかねて蒔き生ずる田を苗代といふ如く、かの山の繼苗を生ずる地を山代といふのであらう。と説き、鹿持雅澄は續木根生だらうといひ、山代と云ふは苗代のしろで、樹木のさかひありて一構かこひたる所といひ、大神景井は續根生知毎やまじと續いたのだといひ、その他にも荒木田久老の如きはやましろは家庭代の意で繼土丹やましろと續けたといひ、高橋殘夢は山根歴の義といひ、この他にも座光寺爲祥の生々窮らない山城の解や、木村鷹太郎の双生を意味せる希臘語のスンゲネスから來たので山代川は、埃及のナイル河などいふ途方もない説もあるが、管見は山城地方に多く自生してゐる續根草即ち二人靜の原ッ場の山城と名物を置いた枕詞と見る。ふは生の義であることは云ふまでもない。

詞林采葉抄には梓には鞘があり柄があり身がある。梓の身といふより道に轉じた見え、燭明抄には旗立つ人は道のしるべとする爲にまづ梓を立てる。古は山ゆく人は枝折をし、野行く人は草を結び梓を作りてこれに旗梓と名づけた。そういふ次第で續けたといひ、代匠記には道のすぐなるを鉞の直きに喩へたといひ、國號考にはみちのみは添へた言でちへ懸る、古戈には柄に乳ちといふ部あり、それへかゝるとしてある。冠言辨には矛の双利とといふとを路へかけたとし、枕詞解には玉鉞の圓まといふよりまどに通ふみちに懸けたといひ、折口信夫は双物と血との關繫から、鉞の血を路に轉じたと説き、多くの人々は玉梓の玉は褒めると説くが、和歌詞譜には神鉞といひ、鐘の響には賜はる鉞といひ、枕詞解には鉞の一種といひ、黒川眞頼は威靈梓たまたまと見御稜威とかゝつたと説く。諸説紛々である。この外にも細戈千足國などと同じく玉鉞満ち足るなどの説も立てられる。

道といふのが古くて、後に手向の神、里人と續けるのは玉鉞をすぐ道の義にとつて續けたものである。これを鉞の身の狭く利きより狭利さよの詞にかけたと説く詞草小苑などの説は宜しくない。

たまづさの使妹

たまづさといふ語が諸家により解釋區々である。たまは褒める詞と見るものと否らざるものとがある。代匠記には玉は美辭、づさは梓にて、梓は弓をあらはし、弓の矢を射遣る如く書をやるよりいふと見え、萬葉考にはづさを分けさは章の字音、文章のこと、つはのと同じと説き、萬葉玉の小琴には玉を著けた梓の木を使の印にもつて行つた古俗の名殘と述べ、詞草小苑にはたまづさは玉瓜たまづりのことで、小くうつくしい玉瓜のやうにと妹に喩へて冠せたとあり、

村田春海は奥州邊で男女が戀のしるしとして厚紙を折つて結んだものを互に送る習があるそれを玉づさといふとき、萬葉美夫君志には村田春海は玉梓が玉づしの通音といつた説や字鏡などを引き、玉づしはづしたまともすずたまともいふもので、その實が一むらに附合つてなるが故に使に轉じて用ゐ、また相親しむ意で妹とも續けたといひ、槻の落葉には玉梓は借字で、とぶ翅つばの略轉であるといひ、飛ぶをたまといふはたむの轉で、天飛ぶを古く天たむと云つた例の如く、たむがたまと轉呼したといひ、橋守部も黒川眞頼も同説である。説は尙一定しないが、惹茨つしの珠を女人の形容に用ゐたのが頗て使のことになつたやうに考へられる。

もゝしきの 大宮

雄略記を始め萬葉に大宮所大宮人などの用例がある。仙覺は大内は百官の直廬の屋敷あれば百敷といふといひ、下河邊長流はこれと同じやうに禁中には百の司の座を定めて百の敷物あるゆゑと説き、契沖は精選本萬葉代匠記には百しきのしきといふは磯城の義で、崇神天皇の磯城瑞籬の宮はめでたき御代であつたので、その御代のやうにめでたき御代を百重ねばかりも此宮で知しめせと祝ひて大宮を百磯城島と名づけそめたのかといひ、眞淵は皇大城の堅きを石に喩へて百の石城の宮と續けたと説き、その説を受けた中にも楯取魚彦は百は美稱といひ、冠言辨には百しきは百石敷くにて玉敷の庭といふといひ、守部は稜威言別にもゝはむくさか、もくさくのむもの重つたもので昌な義で百敷城の大宮と接いだものといふ。後には百敷を直に大宮の意に用ゐる歌も見られるやうになつた。

さす竹の 君、 大宮

さす竹の解釋が區々である。推古紀私記には矢をいふと見えてをる。禁中守衛の士が弓箭を帶してゐるので大宮に

續けたと燭明抄には見えてゐる。又或抄にはさす竹は垣の竹で多いものであるから大宮にかけたとの説も引いてある。萬葉管見抄にはさす竹は殖る竹と解し、代匠記に篠竹かとも説き、冠辭考には立竹といひ、萬葉枕詞解には狹さすたけ虛竹の義で、黍の名であらうといひ、友人豊田八十代は神の宮を造るに四方に竹をさし立て注連繩を張るのをいふと説く。またさす竹は律官と説いた人もある。君との連接に關しても説が多い。矢で身を刺すのは甚だ恐るべきであるから君にかけたといふ私記の説は幼稚な考である。眞淵の組を君に轉じたといふ説も首肯出来ない。雅澄の黍を君にかけたとの説は面白い。黒川真頼のきみは圍きみ茂の義で竹のかきもとと續くといふもむづかしい。日本書紀通釋には守部の説を引き、さす竹のさすは植と同じく根さし植りたる竹の若枝さし榮える意にて君とも大宮とも續けたと説き、折口信夫は繁り合うて立つ竹の籠りあうてゐる意で且こもと音の通する君に言ひかけたと説いた。またこれを支那學の方面から説く説もある。石上枕詞例には竹の異名を此君といふ。その故事からさす竹の君と續けたと説く。冠言辨には刺竹の大宮とは竹苑の故事により竹の宮と續けたと説き、和歌詞讀にはさす竹は律管である。律志に黃鐘は至尊無三與竝也故爲レ宮爲レ君とある。これによりてその續けを想ひやるべきだと説く。

舍人男に續けたのは大宮仕するからと考へられる。然るに和歌詞讀にはさす竹を律管と釋したる故に音なといひ舍人と續けたと強解してゐる。

枕詞に関する研究書目

一 枕詞 燭明抄 三 下河邊長流 寛文十年版 一三 冠辭考 續紹十 上田秋成 寛政八年版

二	萬葉代匠記枕詞	二	契沖	貞享四年成
三	冠辭考	十	賀茂眞淵	寶曆七年板
四	續冠辭考	一	楫取魚彦	明和七年成
五	摘要冠辭考	五	田安宗武	明和八年以前成
六	類聚冠辭略解	九卷合一	深澤薫	安永二年成
七	續冠辭考及同別記	一	服部高保	安永四年成
八	枕言一言抄	一	賀茂季鷹	安永六年成
九	いそのかみ	一	源義亮	寛政十年板
一〇	和歌詞講	二	坐光寺爲祥	安永九年成
一一	枕辭略註	三	惠岳	天明四年成
一二	枕詞證歌附	八	藤原武良由	天明四年成

一四	枕詞補註	二	尾崎雅嘉	寛政十年板
一五	冠辭袖几帳	一	犬飼戸次等	文化九年板
一六	萬葉枕詞解	五	鹿持雅澄	文政五年成
一七	舊詞考	三	推易堂	天保三年
一八	萬葉枕詞考	一	推易堂	
一九	萬葉枕詞考續篇	一	推易堂	
二〇	石上枕詞例	五	高橋殘夢	弘化元年成
二一	三代枕詞例	三	同	
二二	古今集冠辭考	一	黒川眞頼	年月未詳
二三	假名遣枕詞辭典	一	佐佐木弘綱	明治二十四年版

以上は枕詞の解釋に關する古人の著作である。一つの枕詞に關したいろ／＼考究したもの、例へば伴信友の比古姿衣の中にある玉蜻考や鹿持雅澄の單行の玉蜻考といつた類のものや、外國人ではチャンパーレンやディツケンスの著作などもある。これら古人の研究史や一つ一つの枕詞に對する諸家の説なども拙著枕詞の研究と釋義(昭和二年不)に網羅して置いた。

次に語釋の研究とは違つて、作家が詠作をなすに方り、ある語には如何なる枕詞を使用すべきかといふ實用的方面に關する著書も數部ある。その最初になつたのは契沖の詞草正採抄である。この書はもとあまり知られなかつたが、

契沖全集第七篇に收められてある。この類の書目を擧げて見ると次の如きものがある。

- | | | | | | |
|---------|--------|-------|-------------|----------|-------|
| 一 詞草正採抄 | 一 契沖 | 貞享四年成 | 四 みやびこと玉かつら | 一 折加藤景範 | 寛政十年板 |
| 二 詞草小苑 | 一 建部綾足 | 安永二年板 | 五 冠辭 | 例 一 松山貞主 | 享和二年板 |
| 三 冠辭懸緒 | 一 梅取魚彦 | 安永八年成 | | | |

詞草正採抄の外はいづれも啓蒙的のものである。

序 詞

序詞は枕詞の長いもので、適當に云へば序句といふべきかと思ふが、一般の慣用に隨ひ、序詞または單に序と呼ぶ。上田秋成の如きは枕詞と序詞との間に區別を立てないで、よそひといふ汎稱を用ふべきだと主張したが、二句またはそれ以上のものを序とし一句のものは枕詞とすることが便宜である。徳川時代の國學者中には吹風の目に見ぬ如き譬喩の類を序詞と名づけたものもあるが、それは準枕詞などと稱へて今日は適用しない。

序詞の起原を考へて見ると、その由來するところが久しく、枕詞と同じく我が上代文學に幾多の例が見えてゐる。蓋し上代人が自己の表彰を一層有力にする爲に譬喩聯想等により斯の如き措辭を用ゐたものと見える。その原始時代には譬喩と序との間に劃然とした區別のないものもあつたと見えるが、序の方は主想を引き起す爲に置かれながら、

主想には直接關繫をもたないで或る趣きを添へるやうに段々となつていつたものと考へられる、例へば海月くらげなす、たゞよへるの上の五音は枕詞であるが、清寧記に見えてゐる

い隠る山の御尾の竹を本かき刈り末押躰かすなす、八絃琴しらべたること天の下治め給ひし云

の句はなすを使用してあるから、序詞と見るべきか、唯譬喩の文と見るべきか、疑問が湧いてくる如きである。

記紀歌集に収めてある歌の中には、五七調の反覆が規則立つてゐる整形の歌と、無定形とは云はれないが不整形の歌とある。不整形の歌は時代が古いと見られるが、その中に序とも譬喩とも分けにくい措辭がある。仁徳紀所載の宮船枯野號の餘材で作られた琴のすがすがしい音を形容した

枯野を 鹽しほに燒やき しがあまり 琴ことに造り 極たぎき彈ひくや

由良の門とらの 門とら中の 海巖いざに ふれ立つ なづの木きの さやさく

の歌に於て由良の門とらの以下はさやさくにかゝる序と考へられるが、短長四句と見るか五句と見るか疑問である。斯ういふのが古形であらう。

一體長歌に於ける序にはその句數に制限がない。神武天皇の御製の

神風の 伊勢の海の 大石おおいしに はひもとほろふ 細螺しほづまの 一ひといはひ廻り 撃うちてし止まむ

は始めの六句は主想を示す末二句の序である。萬葉集所收の乞食者の古詠には大和の平群山を引起す爲に

韓國の 虎とらとふ神を いけどりに 入いつ取りもち來き その皮を 疊かさねにさして 八重やえだゝみ
平群の山

と七句を重ねてある。枕詞では單に孤疊平群の山とか、八重疊平群山ですむべきを、この長篇では卯月の藥獵のことを云ふので、特に豪壯にあらはさうとして斯く長々と續けたものであらう。

二上山に冠らせる枕詞には玉櫛笥など蓋のあるものを取り出し、そのふたと音より數字の二にうつしてゆくのが普通であるが、大作家持の郭公及藤花を詠じた歌には

桃の花 くれなる色に 匂ひたる 面輪の中に 青柳の 細き眉根を 笑みまがり 朝かげ見

つゝ 乙女子が 手にとりもたる まそ鏡 蓋上山に 木の暮の 繁き谷べを 呼びとよめ

朝飛び渡り 云々

と艶麗に十一句から成る序を加へてゐる。歌聖柿本人麿は愛妻を平沙一帯汐風の藻を吹寄せる石見國に遺して都に旅立つた時、

いさなどり 海邊をさして 和多津の 荒磯の上に か青なる 玉藻沖つ藻 朝羽ぶる 風こ

そよせめ 夕はぶる 浪こそ來よれ 浪のむた かよりかくより 玉藻なす 一より寝し妹を

露霜の 置きてし來れば 云々

と十三句を用ゐ、綿々の情を諳つてゐる。普通なれば單に玉藻なす磨きし妹で済まされるに、その情趣を十二分にあらはす爲に長序を使つたのである。序は、或ることを實と聞いてゐる中に忽にして他へ轉じてゆくところに興味がある。併し本質上主想に従屬するものであるから、あまりに長く連ねると横道に陥る弊がある。人麿の如き偉大な氣魄をもつてゐる豊富な語彙を驅使し、讀者をひきつける力を有してゐてさへ内容空虚の憾が生じ易いのである。それゆ

ゑこの濫用は大に警めなければならぬ。長序は後に出來た宴曲謡曲等の道行文などに交渉を有してゐるが、今この問題には觸れないこととする。

短歌に於ける序は二句三句より成るものが多い。舍人娘子の圓方の浦のさやけき景を

丈夫のさつ矢手挟み立向ひ射る まとかたは見るにさやけし

と雄々しく讚歎した一首は三句半の序を用ゐてある。また豊前の掠梨の濱を詠じた人麿歌集の

吾妹子が赤裳ひづちて植ゑし田を刈りてをさめむ 倉無し濱

の一首は四句の序を用ゐて言語の技巧を弄してある。斯ういふやうに四句の序を用ゐたものは幾らかはあるが、二句または三句から成るものがいづれの集にも多きを占めてゐる。そうしてその位置は三句より成る序は第一第二第三句即ち短歌の上句に置き、二句のものは次の三つの場合がある。

第一句第二句の位 (1)

第二句第三句の位 (2)

第三句第四句の位 (3)

「夏野ゆく小牡鹿の角の」つかのまも妹が心を忘れて思へや
の如きは(1)の例で、あまり延びてゐない鹿の角を短い時間にうつしてある。

我が袖は「汐干に見えぬ沖の石の」入こそ知らね 乾くまもなし

は(2)の例で、譬喩のよく利いてゐる歌である。そうして七五のリズムとなつてゐる。

まさきくてまた歸り見む「丈夫の手に巻きもたる」輛の浦回を
 は(3)の例で、一二の句は第五句の下に續く倒置式のものであることは云ふまでもない。以上は本來五七また七五二句
 のものであるが、

石上「布留の神杉」神さびて戀をも我は更にするかも

の如きはふるの神杉の七音が本來の序でこれに枕詞五音を加へたものである。恰も

足曳の山鳥の尾のしだり尾の 長々し夜をひとりかもねん

が上三句が序であるが、この中足曳のは山の枕詞で、純粹の序は七五二句であると同じさまである。尙茲に問題とな
 り易いのは

妹が門 入り 出見河のとこなめに み雪のこれり未だ冬かも
 との曇り 雨 ふる川のさざれ波 間なくも君はおもほゆるかも (十三)

吾妹子に 衣 かすがのよしき川 よしもあらぬか妹か目を見む

の妹か門、とのぐもり、吾妹子にの類を從來の如く枕詞となし、入り、雨、衣を隔てて泉河、布留川、春日にかゝる
 とするか、或は妹か門入り、との曇り雨、吾妹子に衣と連ねて序となすべきか説の起るところである。第一句に第二
 句の頭の語を連ねただけでは意義をなさないが二句又は二句以上を序となすとの定義に従つてもよいと思ふ。

二句序の中で第一第二句に置く(1)の形は三四の句に置く(3)の形よりも古く、(3)は第二三の句に置く(2)の形よりも古
 いと思はれる。萬葉集中五百五十四首の中。(市村平君の統計を借用すると)(1)の形式のものは二百四十二首、(3)の形

式のものには四十七首、(2)の形式のものは僅に九首であるが、これは自然の結果と考へられる。上代の歌は五七調で二句一章としてゐた、そうして始に序を置いて末に主想を置く慣習から然らざるを得ないのである。併し歌風はいつまでも同姿に止まつてはゐない。拾遺集より金葉を経て千載集に至つてはこれが逆になり一二の句より二三の句に序を置くものが増して來た。これを數字で示すと拾遺集は一二の句には十六、二三の句には十三で、金葉集には一二の句には四、二三の句には十二、千載集には一二の句に四、二三の句に十二の序歌を收めてある。これは七五調が五七調に代つて勢力を得た反應と謂ふべきである。

三句序は二句よりも後に發生すべき性質のものと考へられるが、記紀歌集に於ては必ずしも然うでない。同集に載つてゐる短歌十二首の中には三句序の歌が多い。萬葉集は二句序の歌が約三百、三句序の歌は二百四十首を算する。

この序の中には實景を直ちに取り入れて活用させたものと、空想を述べて序としたものとの別がある。例へば長皇子が伊賀の名張のことを

宵に逢ひてあした面無み（面）にかけ長き妹が庵せりけむ

と詠ぜられた上二句の序は空想の方で、大伴家持が能登で詠んだ

「香島より熊來をさして漕ぐ舟の楫取る」間なく都しおもほゆ

の如きは實景を入れたもので、斯ういふ類を古人は有心ノ序と名づけた。萬葉作家の中にはこれらの序を好んで使用した有名無名の作家が少くなかつた、有心に對するものは別に名は命じてないが、古例にならへば無心序と稱しても不都合はない。近時これを實景の序虚景の序と云ふ人もあるが、まだ一般には用ゐられてゐない。

短歌の中序を以て起し末に主想を點出する短歌を古人は序歌と稱し來つた。序歌は普通にじよかと呼ぶが、賀茂眞淵の如きはこれをついでうたと云つてゐる。またぞかと吳音で讀んである書もある。序歌の嚴密の定義を下したものはないが、眞淵はにひなびの中に

序歌てふ體をもよみ習ふべし、本にくまぐまの事をあげ、末に只一つの心をいふなれば即ち古の意なり。

と云つてある。この本といふは上の句と解すれば、

獨して物を思へば「秋の田の稻葉の」そよといふ人のなき

の如き三四の句に序を用ゐてある歌を序歌といふべきか、一寸疑問になる。また

夏の夜は 浦島が子の箱なれや」はかなく明けて悔しかるらむ

の如きも二三の句に序を置いてあるが、主想をあらはす部分はその前後によりて序を挾んでゐて古人が一むきに云つてゐる序歌とは趣が異つてゐる。併し今は序を以てゐるものをすべて指すとして善からう。

次に序詞の種類とその發展の徑路をたどつて見る。記紀歌には譬喩式のもの整調式のもの大部分を占めてゐる。

譬喩式のもの。

倭邊に西風にしふきあけて雲ばなれ そぎ居りとも吾れ忘れめや (仁徳記)

日下江ひさかたの入江の蓮花はちす 身の盛人ともしきろかも (雄略記)

の如きはその古いもので、のとかのすとかなす等の辭を加へてないから隱喩に屬するものである。

御諸みもろのいつ櫃がもとかしがもと ゆゝしきかも櫃原處女 (雄略記)

の如きは掛詞式と見る人もあるが、これも極のもとやうにと比した意が相通つてゐる。

整調式のもの

おしてる難波の崎のならば瀨 ならばむとこそその兒は有けめ (仁徳記)

引田の若栗栖原 若くへにる寢てましもの老にけるかな (雄略記)

大君の御帯の倭文はた結びたれ 誰やし人も相思はなくに (武烈記)

の如きはその古いもので、

山川に鶯^{おし}鶯^{おし}ふたつゐてたぐひよく たぐへる妹を誰かるにけむ (孝徳紀)

の如きは整調式のもので同時に譬喩式を兼ねてゐる。これらは後代のものであつて、漢文學の影響も加つてゐると思はれる。尤恭記に見える木梨輕太子の詠の

小竹葉にうつや霰の たしだしにる寢てむ後は人はかゆとも

の如きは霰の音より同音の慥かにといふ語に轉じたもので第一種と第二種とを合せたやうな複雑味のあるものである。萬葉集時代には枕詞と共に序詞も多く用ゐられその數が夥しいことは既に述べた通であるが、その種類は譬喩式のものも最多數を占め、掛詞式のもの、これに次ぎ、同音を反復してゐるものがまたそれに次いでをる。萬葉には相聞歌が多い。その中にも男女間の情をのべた歌には譬喩を取るものが多い。自家の胸中を抽象的な語であらはずより喩を引いてのべる方が婉曲で對者に快い感じを與へるから自らさういふ序詞が多く用ゐられたのであらう。鏡女王の
天智天皇に和し奉つた

秋山の木の下がくり行く水の 吾こそまざめみおもひよりは

の如き譬喩がいかにも生きてゐる、歌聖人麿は序詞も自由自在に使つたもので、自然をよく見つめて抒情の作をものしたのが少くない。自然をとり入れて

446 三熊野の浦の濱木綿百重たす 心は思へど直に逢はぬかも

の如きがある。挽歌にも懷を述べた作にも同様な例がある。抒情歌には敘景の句を序としたものが多い。想を述べる句やそれを修飾する句は動詞形容詞や副詞を用ゐるから、それを修飾する爲に用ゐる序は主観的の譬喩より客観的の方がふさはしい。またこれに反して敘景歌には抒情の序句を以てするのが多い。前に挙げた

宵に逢ひてあした面なみ 隠(名)にか氣長き妹が庵せりけむ

丈夫のさつ矢手挟み立向ひ射る 暁(名)方は見るにさやけし

の如きはその好例である。従來語を隔てゝかゝるといはれた「をとめ子が袖ふる山」でも「妹が手をとろしの池」でも、「春草を馬喰山」でも同様のものと云へる。雑の歌の中旅の歌などにはそういう傾向がある。人事と自然とを參差して互に使用するのは我が國文學の特徴であるがそれは萬葉集の序歌にも見られる。而して抒情歌の序には自然を凝視した句が多く沉思の餘に成るものが普通で、雑の部の旅などの歌には多少軽い調子で面白く詠じたものが少くない。掛詞式の序詞は記紀には僅々一首か二首かぐらゐに過ぎなかつたが、萬葉集にはその類のも随分増加して來た。

和田の底沖つ白浪 立田山いつか越えなむ妹があたり見む
をとめらが放の髪を 木綿の山雲な棚曳き家のあたり見む

めづらしき人を吾家に 住吉の岸の垣生を見むよしもかな

に於けるが如く、白浪の立つといふより大和の立田に、髪を結ぶといふより木綿の山、住ますといふより住吉に轉じた軽い氣分の序が多く見られるやうになつた。地名でなくとも又

足引の山下とよみ鳴く鹿の聲 ともしかも吾が心夫

夏野ゆく小鹿の角の つかの間も妹が心を忘れて思へや

に於けるが如く他のものゝ爲に述べた語を別のものへ轉じて用ゐる序も次第に多くなつて來た。特に

妹が目を見まく堀江のさゞら波 しきて戀ひつゝありと告こそ

の如き堀江のさゞら波はしきての序であり、上の妹が目を見まく欲りと云ひかけ且上の二句が下の主想と關聯して離してはならないものとなつてゐる。斯の如き聯珠的の序詞は原始時代に比べると非常に進展したものである。萬葉集中にては飛鳥藤原時代が序詞が最も盛にあつた。固より作家の好尚にもよることながら時世の流は争はれないものである。

次に八代集に互りて考察するに、譬喩式のものが多い、次に掛詞式のもの次に整調式のものといふ順である。併し縁語や掛詞の流行した時代とていづれの種類にもその色彩が著しい。

水の面に生ふる五月の浮草の うきことあれや根をたえて來ぬ (古、雜)

の如きは浮草、憂きと同音反覆の外に根をたえては浮草の縁語である。

思ひいづる常盤の山の岩躑躅 いはねばこそあれ戀しきものを (古、戀)

の如きは岩つゞし言はねと重ねる外に常盤の山に思ひ出づる時と言掛け、而も思ひいづるは主想と離すことの出來な

い成分となつてゐる。「かくとだにえやは伊次のさしも草」の歌、「逢ふことを今は限と三輪の山杉の過ぎにし」の歌等この類の詠が少くない。

逢ふことは雲井遙になる神の 音に聞きつゝ戀わたるかな (古、戀)

の如き鳴神の音と修飾的に續けた外に雲外の雷の音のやうにと喩へ、また鳴神に成るの義を掛け、尙遠ふ事は雲井遙になるといふことは主想の成分となつてゐる。

夕暮はまつにもかゝる白露の おくる朝や消えははつらむ (後、戀)

の如き白露の置くといふを起くると轉義してゐる外に松にかゝる白露のは序のやうであるが、松に待を掛けてあり、待つ方より云へば白露は涙の意にもとれ、且下句との關繫より云へば上句も動いてゐて、單純な序ではない。

偽を糺の森の木綿襪 かけてぞ誓へ我を思はゞ (新古今、戀)

の如き木綿襪掛けを心にかけてうつし、糺の森の木綿襪といふ序には偽を正すと言掛け、且下の主想と離されない關繫に立つてゐる。以上のやうな複雑な序詞は尙置かるべき位置に於ても古く第一第二にあつたものが第二第三にすゑるとか主想の一部は倒置して強き表現をなすなど工夫を凝し、また序となるべき材料につきても一首の風格にふさはしいものを探取するなど吾人の意料の外にあるものがある。八代集の如き技巧に墮したものと一概に排斥するのは正論ではない。以上で序詞の大意は粗々説いたと思ふ。(終)